

互いに受け入れ合うために

(ローマ一五・七〜二三)

世はピョンチャン一色。現時点（一五日夜）で我が国のメダル獲得数は七個。これは長野、ソチに続くものであり、なかなかの健闘を見せているが、中には悲しい報道も。女子ショートトラック五〇〇mで起こった「炎上」事件である。反則のジャッジにより繰り上げで銅メダルになったカナダ人選手のSNSが失格になった選手の国の人々の心無い書き込みによって荒らされてしまったというのだ。あまりの混乱ぶりにIOCまでが「選手たちをリスパクトし、五輪精神を支持するように」とのコメントを出したという。単なる勝敗だけでなく、差別なき友情、フェアプレーのオリンピック精神が溢れるよう祈りたい。

閑話休題。イエスの死とよみがえり、そして聖霊の降臨によって始まった原始キリスト教運動は急速な拡大をあげたのだが、その民族、文化を超えた福音の性質が受肉していくためには当然のことながら大きな戦いがあった。パウロの与えた命令を読みとく、主にある私たちが互いに受け入れ合うための基盤を確認したい。

一、イエスによる全民族受容の事実

パウロは読者に対して互いに受け入れ合う、言葉を変えれば快く交わりの中に迎えられることを命じているのだが、それには前提となる事実がある。それはキリストがユダヤ人も異邦人もその民族の別なく受け入れてくださったことである。まず八節にはキリストが神の真理をあらわすために、割礼のある者のしもべとなられたということが言及される。その意味するところはイエスがユダヤ民族のための奉仕者、或いは割礼を含む律法に対する奉仕者となったということであろう。イエスの来臨はあのザカリヤの預言にあるように（ルカ一・六七以下）神がアブラハムに与えられた約束の成就であり、その結果神の民イスラエルは救われるのである。しかしそれは事の半分しかのべていない。というのも九節にはユダヤ人だけではなく異邦人もまたあわれみのゆえに神をあがめるようになるためと書かれているからである。このことはイスラエルの慰めを待ち望んでいたシメオンの、恐らくはイザヤ書を引用した預言の中にも語られている（ルカ二・二九〜三三）。つまりユダヤ人の王イエスは全世界を罪から救い出し、神との交わりの中に導きいれるメシアであり、その事実こそが私たち神の

しもべ、はしためが全ての人を快く受け入れる揺るぎなき基盤なのである。

二、新旧約を貫く神の約束

私たちが全ての人々を教会の交わりに快く導きいれるもう一つの基盤がある。それはイエスによってなされた民族を超える救済の業については旧契約の中に証しされているということである。九節から十二節においてパウロは詩篇一八・四九、申命記三二・四三、詩一七・一、更にはイザヤ一・一〇などを立て続けに引用し、自らの主張が決していい加減なものではなく、神のことばに確かに証しされているものであることを示している。これは実に興味深い。こまかにロマ三・二一の変奏である。なるほど神の義は一面において律法と「離れて」いなければならない。しかし他方では神の救いの計画は律法と預言者、即ち聖書に「証しされ」ていなければならない。そうでなければ神は偽り者になってしまうからだ。感謝なことに神は偽り者ではなかった。思い出してみよう。父祖アブラハムを選び、その最初の約束を与えた時、主なる神はなんと言われたか。「あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたを呪う者をわたしはのろふ。地のすべての民族はあなたによつて祝福される、（創一二・三）」である。ゆえに神のことばを愛し、したがう私たちが人種・民族を超えて受け入れあうことはオプシオンではなく、必達の命令なのだ。

* * *

一九六八年十月一七日夕刻、メキシコ五輪のスタジアムで事件は起こった。男子二〇〇m走の一位、トミー・スミス（米国）と三位のジョン・カーロスがやったのだ。胸には人権を掲げるバッチをつけた。黒い手袋をはめた彼らは星条旗が挙げられる最中、その手を虚空に突き出した。黒人差別反対のデモンストレーションだった。二位の選手は豪州代表のピーター・ノーマン。彼の胸にはやはり人権のバッチがあつた。表彰式の直前、トミーとジョンはピーターに言ったそうだ。「君は白人だ。知らんぷりをしてくれ。これは俺たちの問題だから」しかし熱心なクリスチャンだったピーターはきっぱりとこう言った。「僕も本気さ。なあ、バッチはまたあるかい？」結果は苛烈かつ悲惨だった。ピーターは白豪主義の犠牲者になり名誉も選手生命も健康も奪われて彼は死んだ。だが葬儀の際、彼の棺を担いだのはジョンとトミーだった。互いに受け入れ合うことは弟子であることへの代価である。アーメン。